

やまたのおろち

イザナミと別れて逃げかえってきたイザナキは、黄泉の国の汚れをはらおうと、体を洗いました。そのとき、イザナキの杖や帯からつぎつぎと神さまが生まれました。しまいに、右の目を洗つたときに生まれたのは、アマテラスという女神おとこがみまでした。左の目を洗つたときには、ツクヨミという男神おんながみさま、最後に、鼻を洗つたときに生まれたのはスサノオという男神さまでした。

イザナキは、アマテラスに高天原を治めさせ、ツクヨミには夜を治めさせ、スサノオには海を治めさせることにしました。ところが、スサノオは、母親のイザナミに会いたいと泣きさけび、大あばれしたので、とうとう、イザナキは、

「どこへでも行つてしまふがいい」といつて、スサノオを追いだしてしまいました。

さて、ここからは、スサノオの物語です。

追放されたスサノオは、出雲の國の肥の川のほとり、鳥髪とりかみという所にやつて来ました。そのとき、肥の川の川上から箸はしが一本流れてきました。そこでスサノオは、

「この川の上流に、だれか人がいるのだな」と思つて、たずねていくことにしました。川に沿つて上つていくと、おじいさんとおばあさんが、若い娘をあいだに座らせて、泣いていました。スサノオが、

「おまえたちはだれなのだ」とたずねると、おじいさんは、

「わたしは、この國の神の子で、アシナヅチと申します。妻の名はテナヅチ、娘はクシナダヒメと申します」と答こゝえました。スサノオは、

「おまえたちは、どうして泣いているのだ」とたずねました。すると、アシナヅチがいいました。

「わたしたちには、娘が八人おりました。ところが、高志の國から、毎年、やまたのおろちがやつて来ては、娘をひとりずつ食べてしましました。最後にこのクシナダヒメが残りました。そして、今まで、やまたのおろちがやつて来る時期になつたのです。この子も食べられてしまうと思うと悲しくて、それで、泣いているのです」

スサノオが、

「そのやまたのおろちというのは、どんなやつなのだ」とたずねると、アシナヅチは、

「目はほおずきの実のように赤くて、頭が八つと、しつぽが八本あります。からだは、苔むし、杉や檜が生えていて、長さは、八つの谷、八つの丘にわたるほど長いのです。腹はただれいつも血が出ております」と答えました。

スサノオは、

「そのやまたのおろちを退治しよう。そのかわり、娘さんをわたしにくれないか」といました。アシナヅチは、

「でも、わたしどもは、あなたの名前すらぞんじません」といました。

「わたしは、スサノオといつて、アマテラスの弟だ。いま、天から降りてきましたところなのだ」

それを聞くと、アシナヅチもテナヅチも、おどろいて、

「それは恐れ多いことでござります。喜んで娘をさしあげましょう」といました。

スサノオは、クシナダヒメを櫛くしに変えて、自分の髪にさしました。それから、ふたりにいいました。

「おまえたちは、まず、八塩折やしおおりの強い酒を造るのだ。それから、垣根をめぐらし、その垣根に門を八つ作るのだ。それぞれの門には、神棚を作り、そこに酒の桶おけを供えて、八塩折の酒をたっぷり入れて、待っているがいい」

アシナヅチとテナヅチは、いわれたとおり、八塩折の酒を造り、垣根をめぐらして八つの神棚を作り、酒を供えました。それから、やまたのおろちを待ちました。

やがて、ふたりのいつた通り、やまたのおろちがやつて来ました。

やまたのおろちは、すぐに、八つの頭をそれぞれの桶に突つこんで酒を飲みはじめました。すっかり飲んでしまうと、やまたのおろちは、酔つて寝てしまいました。そこで、スサノオは、つるぎを抜いて、やまたのおろちをずたずたに切り刻んでしまいました。その血が流れて肥の川はまっかに染まりました。

スサノオが、しつぽを切ったとき、つるぎの刃にカチンと何かが当たつて、刃のが欠けてしまいました。ふしぎに思つて刃の先でしつぽをすつと切りひらいてみると、一本の太刀たちが出てきました。その太刀には、ふつうでないふしぎな力があるように感じたので、スサノオは、太刀をアマテラスにさしあげました。これを草薙くさなぎの太刀といいます。

こうして、スサノオは、出雲の地に宮を造つて落ち着くことになりました。アシナヅチ

は、その宮の長官になり、クシナダヒメは、スサノオの妻になりました。
スサノオの詠んだというこんな歌が残っています。

八雲立つ
出雲八重垣
妻籠みに 八重垣作る

その八重垣を

八重の雲がわき起こる わき出る雲は八重の垣根を作る

妻とくらすために 八重の垣根を作る

ああ、すばらしいその八重の垣根よ

* 八塩折の酒 何度も繰り返し醸した強い酒

原話..『古事記 祝詞』日本古典文学大系／岩波書店
再話..村上郁